

## 編集後記

教育にまつわる事柄ほど、パラドックスに満ちた問題はないであろう。かつては受験競争と詰め込み教育が批判され、“ゆとり”と個性を重視する教育のあり方が問われてきた。特に、1960年代の高度成長以後は画一主義の弊害が指摘され、今日まで教育の“個性化”を図る模索が続いてきたといえるであろう。そのため、大学受験の形態や試験科目にも大きな変化が見られるようになり、大学教育も様々な対応を迫られてきたことは確かである。

すでに小学校から中学校へ、中学校から高校へと学習内容の移行が進み、“ゆとり”と個性化をめざして、教育の多様化と選択幅が広がってきたことはいうまでもない。しかし、このような教育の多様化と改革の模索は、人間の存在感を高めることにつながってきたであろうか。いじめの陰湿化や凶悪犯罪の低年齢化が進み、引きこもりや虐待などの実態が取り上げられるたびに、ネガティブな気持ちにさせられるのは私だけではないだろう。かつて“右上がり”の経済成長は豊かさを実感させたが、それがかえって“目くらまし”となり、人間性の涵養を見失ってきたように思えてならない。

したがって、教育を危ぶむ声は依然として大きく、大学教育の模索と改革はこれからも続くであろう。『中部大学教育研究』は、そのような大学教育の一里塚となることをめざして2000年度から刊行されたものである。

本年度の『中部大学教育研究』第4号は、大学教育と教育評価そのものを見直すとともに、前号に引き続いて大学の教師像を問う論考、アメリカでのFD（ファカルティ・デヴェロップメント）を取り上げた論考を掲載し、大学教師の姿勢や教育効果に対する問題提起を行っている。そして、教育評価や実践報告の事例を多数出し合い、様々な角度から大学教育の向上を図る提言がなされている。特に、入学前教育や学習支援室の重要性はますます高まるであろうし、これからも語学力や情報処理の能力向上をめざす模索は続くであろう。

いうまでもなく、高等教育の大衆化は世界的な趨勢であり、社会の成熟過程に必然化する現象である。大学教育はそのような社会的要請に応えなければならないのであり、まさに今大学教師の責任が問われているといわなければならない。多くの皆さんが『中部大学教育研究』を参考に切磋琢磨されることを願うとともに、編集委員会に忌憚のない御意見をお寄せいただければ幸いである。

2005年1月

(河内)